

# 会 議 録

<会議名称> 令和4年度 第1回岸和田市小中一貫教育推進会議

<開催日>令和4年5月31日(火)

<時 間>15時30分～17時

<場 所>岸和田市立職員会館 2階 大会議室

<出席者> ○出席、■欠席

(学校関係者)

和泉校長	北川校長	南教頭	上ノ山教頭	何森教諭	川本教諭
○	○	○	○	○	■

(教育委員会事務局)

片山学校教育部長 (委員長)	松本学校教育課長 (副委員長)	八幡人権教育課長	角銅指導主事
○	○	○	○

(学識経験者)

山口教授
○

<議題等>

1. 教育委員会挨拶
2. 委員自己紹介
3. 説明
  - ・岸和田市小中一貫教育基本方針について
  - ・小中一貫教育推進会議の目的・組織・役割等
  - ・令和3年度小中一貫教育推進会議の協議内容について
  - ・小中一貫教育実施計画について
4. 意見交換等
5. 今後の予定

<当日配布資料>

- ・岸和田市小中一貫教育基本方針
- ・岸和田市小中一貫教育推進会議 設置要領
- ・令和3年度 小中一貫教育推進会議まとめ
- ・小中一貫教育の一般的な成果と課題
- ・小中一貫教育実施計画

## 1. 教育委員会挨拶

### 【片山委員長】

こんにちは。学校教育部の片山です。本日は何かとご多用の中、第1回岸和田市小中一貫教育推進会議にご出席いただきましてありがとうございます。

小中一貫教育推進会議は、昨年度に発足し、今年度が2年目となります。この後、担当からも説明がありますが、昨年度の推進会議では、小中一貫教育を進めることによる「メリット」とともに、多忙化をはじめとする「デメリット」について、広く意見を出していただきました。

今年度は、当初の実施計画をふまえると、小中一貫教育準備期の2年目となりますので、昨年度よりも具体的な協議を進めてまいりたいと考えております。新しいことを進めていこうとすると、必ず課題が出てまいります。ぜひ忌憚ないご意見を出していただき、岸和田の子どもたちにとって大切なことは何か、という視点に立ちながら、より良い小中一貫教育の推進に向けてご協議いただきたいと思います。

なお、今年度の推進会議は、全部で7回実施する計画をしております。大変お忙しい中、たくさんの時間をいただくこととなりますが、ぜひご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

また、本日は、学識経験者として関西福祉大学 教育学部 児童教育学科 教職センター教授 山口偉一先生にご参加いただいております。先生には、これまでのご経験をふまえ、また専門的な見地から、小中一貫教育推進に向けたご助言を賜りたいと思っております。よろしくお願い申し上げます。

それではこの後、長時間になりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 2. 委員自己紹介

## 3. 説明

### 【角銅委員】

(資料にしたがって説明) ※添付資料参照

- ・岸和田市小中一貫教育基本方針について
- ・小中一貫教育推進会議の目的・組織・役割等
- ・令和3年度小中一貫教育推進会議の協議内容について
- ・小中一貫教育実施計画について

## 4. 意見交換等

### 【片山委員長】

今の説明に何か質問があれば出してほしい。

### 【何森委員】

昨年度のまとめとして、地域の声を取り入れることが必要であるという前提の中で、「必

要に応じて」アンケート等をとる、といった記載がある。必要でなければ、地域の声は聞かないのか。地域の声を聞くことについて、積極性が感じられない。地域の声を取り入れることは大切であるという認識はあるのか。

また、「中1ギャップ」という言葉は、今後は使わないとあるが、個人的には認識が変わらなければむしろ使った方がよいと考えている。このことについて、どのように考えているか。

#### 【松本副委員長】

地域の声を取り入れることは大切であるという認識には変わらない。思いを聞くことをせずに、進めることはない。基本方針の8ページにもコミュニティ・スクールのことについて記載している。学校運営に対してこれまで以上に地域の声を取り入れる方向になっている。したがって、地域の声を積極的に取り入れようという考え方である。

#### 【角銅委員】

「中1ギャップ」という言葉を全く使わないので、「中1ギャップ」の状況が存在しないとは考えていない。いわゆる「中1ギャップ」と言われる状況は、存在すると認識している。安易にこの言葉を使わないということ。

#### 【片山委員長】

では、中身のことも含めて幅広く意見をいただきたい。

#### 【和泉委員】

小学校長会においても、小中一貫教育推進会議での話をその都度情報共有している。また、校長会の研修として市教委が考えている小中一貫教育について共有する場を持ったところ。その場でも、校長によってさまざまな捉えがある。進めていくのであれば、どんな方法でやっていくのかを具体的に示してもらわないと進まないという意見や、一方で新しいことをやっていくということになれば、かなり負担があるという意見もある。

それから、岸和田市の校区の状況を見たときに、同じ小学校から複数の中学校に分かれるような校区もあり、めざす子ども像を考えるにしても、うまくいかない校区があるので、今後校区割りのことも考えていく必要があるという意見もある。

#### 【片山委員長】

負担感の部分は昨年度もこの場でいろいろとご意見が出ていた。

#### 【何森委員】

小中一貫教育に関する成果と課題については、一般的なものだけでなく、岸和田市で導入したらどのようなメリットやデメリットがあるかを研究してほしいと要望したので、別紙が出てきたと思うのだが、地理的条件というのが課題点の大半のように読める。しかし、地理的条件だけだろうか。例えば評価という観点で言えば、中学校の先生が小学校へ、小

学校の先生が中学校へ行って指導する場合に、評価をしっかりとできるのか不安だ、という意見がたくさんある。

#### 【角銅委員】

あくまでこれは現時点でのまとめ。地理的条件だけとは考えていない。この推進会議で明らかになったものも含めて、随時加えていこうと考えている。

#### 【松本副委員長】

メリットだけでなくデメリットも出す必要があるということで、現時点のものとして出した。これが全てで、これ以外は問題ないとは考えていないので、我々が気づかないことをこの場を出していただければ反映していく。

基本的なイメージとして、中学校の先生が小学校へ行って英語を指導するといったことは、以前より岸和田市でも行われているので、ある程度形になっていると思うが、小学校から中学校に、というのはあまり前例がないので、地理的なことだけでなく、やはりハードルが高い印象がある。

#### 【八幡委員】

過去に、小学校の教員に中学校の体育の授業へ来ていただいたことがある。その時はその時で、小学校の先生が来てくれたということで、中学生はとても喜んだ。そういうこともあるので、いろんな角度から意見をいただければと思う。

#### 【片山委員長】

ここまでの意見をふまえて、山口先生のご意見をいただきたい。

#### 【山口教授】

小中一貫教育は、あくまでも教育を考える枠組みであるということ。その枠組みの中に何を入れるのかは、それぞれの学校の先生方、また保護者や地域の方々の創意工夫になる。したがって、学校教育に関して地域の意見を聞かせていただくことは必要だと思う。

また各学校の先生方に、岸和田市の小中一貫教育はこのように考え、今後の方向性や随時の進捗等について教育委員会が説明するなど、いろいろなレベルでの啓発が必要。姫路市では、担当の指導主事が各校区の要請に応じて説明を行った。教職員はむろんのこと、場合によってはPTAや自治会をも対象にして説明を行ったことにより小中一貫教育に対して幅広く理解が進んだ。

さらに、小中一貫教育を推進するにあたり、必ずこれこれのものを行わなければならないというような、固定概念にとらわれてしまうのは良くない。例えば、相互乗り入れ授業をしなければならなくなると、ハードルが非常に高くなる。姫路市の義務教育学校においても、以前は小学校の教員が中学校で図工の授業を行っていたが、現実問題として難しいことがたくさん出てきた。例えば評価の問題である。中学校では定期テストを作らなければならないが、小学校では自作テストを作っていない状況であり、テスト作成ひとつとっ

ても非常に難しい面がある。また、中学校の評価・評定は、高校入試に直結する問題なので、保護者の目も非常に厳しいものがある。

話を戻すが、小中一貫教育をする限りは、このことをしなければならないという固定概念は一旦横に置いておいて、市や各中学校区で取組の焦点化を行い、本当に必要なこと、これはだけは必ずするというを具体に出していきながら進めることが大切。ちなみに姫路市の場合は、三つの要素を満たしておけば、「姫路市の小中一貫教育」と定義づけた。

まず一つ目は、小学校と中学校が9年間でこういう子どもを育てていこうという、いわゆるめざす子ども像を設定すること。二つ目は、発達段階に応じて、一貫した教育内容であったり、方法であったり、形態であったり、それは何でも構わないが、とにかく中学校区としてこれを一貫させるというものをまず一つ決めること。三つ目は、小学校と中学校が一緒に汗をかいて取り組んでいく。つまり小中学校の教職員の協働。この三つの要素を取り組んでいくことを、小中一貫教育とした。

姫路市は35の中学校区があったので、35通りの小中一貫教育を進めていくイメージ。中国山地のふもとにある校区もあれば、中心部の都市化された校区、また島の学校もあるので、ひとくくりにはできない。学校の規模も、小中学校を合わせたら3000人超の規模の学校もあれば、50、60人程度の学校もある。何よりもねらいは、小学校と中学校の先生方がもっと仲良くなりましょう、もっと話をして仲間としてお互いが協力し合いながら、少しでもよい教育をしていこうということ。それが一番のねらい。

義務教育学校の校長を4年間務めて、一番大事なのは、小学校と中学校の先生が普段から仲間意識を持って、自分たちの困り感であったり、自分たちのやっていることをお互いが話して、お互いが学び合ったり助け合ったりして、小中9年間で子どもの学びと育ちを保障する枠組みを作っていこうという意識を持つことだと感じた。

こうでなければならないという既成概念にとらわれず、まずは小学校と中学校の先生方で、自分たちは何ができるかというようなことを、一度話してみることが必要。そのためには、できたら市で簡単なフォーマットのようなものを作成していただくといいかもしれない。姫路市でまずやったのは、小中の合同研修。生徒指導でも、学習指導でも、子どもの実態に即した具体的な課題などについて、お互いに顔を合わせて、講師などの同じ話を聞いて、互いの思いをグループで語り合うことをした。ただ会議の数は増える。減ることはない。しかし、自分たちがやっている教育に対しての見方が変わったり、可能性が開けてきたりして、取組が充実すれば互いの有用感が高まる。要は、実態に応じた取組みの焦点化を行うことで、会議等を必要最小限にすること。

とにかく今何が必要か、自分たちが継続できること、子どもの実態の中でできることを大切にしてほしい。ある時期は熱心に取り組んだが、後々に残骸だけがあるみたいなことはよくある。研究発表の場では必ず成功事例が紹介されるが、継続していなければ意味がない。

#### 【何森委員】

よく分かった。質問だが、姫路の小中一貫教育の方針には、相互乗り入れ指導は入っているのか。

### 【山口教授】

入っていない。相互乗り入れ指導は、たんなる一形態。フレームと中身はきっちりと分けて考えていくべき。

それと、いわゆる中1ギャップ。不登校問題とか、暴力行為とか。私の実感としたら、今はむしろ小学校の方が難しい状況もみられる。よく小中一貫教育の話を進めていくと、中学校にはメリットがあるが小学校はどうなのかといった話が挙がる。私の経験からは、むしろ小学校の方がメリットは多かった。中学校での生徒指導等の対応方法を小学校が学ぶことで、組織的・効果的に問題に対応できるようになった。

それともう一つは、不登校の問題などの生徒指導上の課題は、学校だけが努力して解決できるような問題ではない。虐待もそう。しかし、現実的にこのような問題に対して少しでも機能的・効果的な対応が求められ、学校がある意味追い詰められている状況にある。小学校と中学校とが一緒に仲間として、情報の共有と協働的な取組をすすめていかなければ、ますます状況はわるくなるのではないか。

### 【和泉委員】

お話をお伺いして、気持ちが楽になった。カリキュラムを綺麗に揃えてスタートしなければいけないといったイメージを持っている人は多い。枠を決めれば、あとは部分部分でいい。

### 【松本副委員長】

岸和田市では、すでに生徒指導の研修や学力の研修、あるいはキャリア教育の中学校区の目標も立てている。これをさらに充実させればいいのではないか、という気持ちになった。

### 【北川委員】

大人の目線で考えたらいけない。子どもがどういう風に育っていくか、という視点で考えていくことが大切。

### 【山口教授】

町屋をイメージしたらいいのではないか。間口が狭くてもいいから、奥行きを広く。とにかく子どものことを小中でいっしょに考えよう。9年間で育てていこう。一緒に考え、取組を少しずつでも増やしていったり、深めていったりしよう。そういう発想。「～しなければいけない」というアレルギーは取っ払って、もっと実を取ろう。一度、いっしょに授業を作ってみよう。キャリア教育の部分で事例研究をやってみよう。

姫路市においても、すべての中学校区の取組が年々深化しているわけではない。岸和田市においては、令和9年度にむけて、中学校ブロックでめざす子ども像を策定し、小中でスモールステップをふまれていかれたらいいのではないか。

**【片山委員長】**

本日は第1回目ということで、今後、校区の推進会議や、めざす子ども像の設定、モデル校区の選定など、引き続き協議をしていきたい。

**【角銅委員】**

これで第1回の岸和田市小中一貫教育推進会議を終了いたします。本日はどうも、ありがとうございました。

